

社会福祉事業団によるデイサービス施設の利用圏と送迎体制

一萩市における社会福祉事業団を主体としたデイサービス施設の整備プロセス その3ー

デイサービス施設 社会福祉事業団 利用圏
送迎体制

- 正会員 ○石橋 凧砂**
- 正会員 三島 幸子*
- 正会員 大橋 彩織**
- 正会員 孔 相権***
- 正会員 中園 真人****
- 正会員 山本 幸子*****

1. はじめに

本報では萩市社会福祉事業団の7施設を対象として、利用者属性及び利用圏、送迎体制の分析を行い、利用構造を明らかにすることを目的としている。

調査内容は施設利用者データの収集^{注1)}、送迎調査である。送迎調査は、施設Iは平成26年9月5日、施設Fは9月10日、施設Aは9月11日、施設Hは9月12日、施設Eは9月29日、施設Bは9月30日、施設Dは10月2日、3日に行った。

2. 利用者の基本属性と利用形態

図1に施設利用者の基本属性を示す。性別については全ての施設で6割以上が女性であり、全体平均は約70%となっているが、女性が80%を超える施設Aなども確認でき施設間で多少の差異を認めることができる。年齢については全体では80歳代が半数を超え最も多く、次いで90歳以上が約30%で続いており、施設間で多少のばらつきは確認できるが80歳代が最も多く、次いで90歳以上が多い傾向は全施設で共通している。利用者の要介護度については各施設でばらつきが大きい。施設Fは民家改修型の施設であるため設備が整っていないにもかかわらず要介護3以上の利用者が56%を占めており、要介護5の利用者も4名通っている。これに対し施設Aは要介護3以上の利用者は10%以下となっており、要介護5の利用者もない状況であり、利用者の多くが軽度の要介護高齢者となっている。車イス利用者についても各施設の利用者の要介護に対応しており、要介護4、5といった重度要介護高齢者の利用者が多くなるほど車イス利用者の割合が多くなるため、各施設間に差異を認めることができる。

次に施設の利用回数及び入浴サービスの有無と種類を図2に示す。施設の利用回数については各施設間でばらつきが確認できるものの全施設で週1~2回の利用者の割合が50%を超えておりもっとも多く、週5回以上の利用者は10%以下となっており、低頻度の利用者が最も多くなり、多頻度の利用者が少ない傾向は共通している。

入浴サービスについては各施設間でばらつきが大きい。

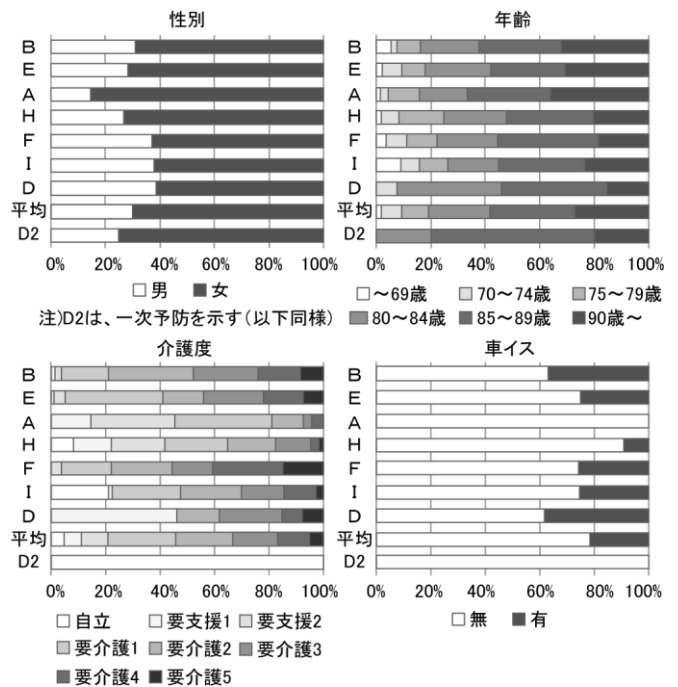


図1 施設の利用者の基本属性

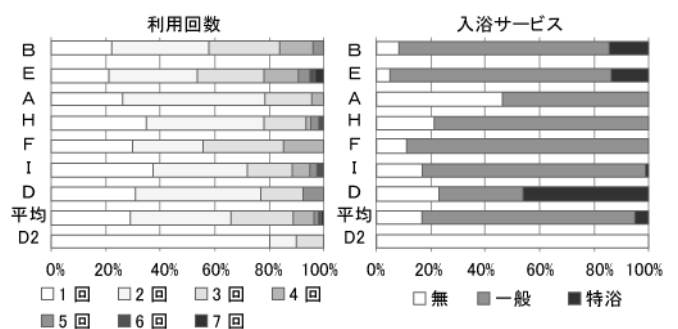


図2 施設の利用回数と入浴サービス

全施設で大多数の利用者が入浴サービスを受けているが、要介護度が軽度の利用者が多い施設Aでは入浴サービスを受けていない利用者が半数近く存在する。また、施設Dでは特浴の利用者半数近くとなっており、特浴利用についても施設間で差異が認められる。

The Use Sphere and Method of Picking up Users of Day Care Facilities by “Hagi Syakaifukusi Jigyoudan”
The Supply Process of Day Care Facilities for Elderly-people by Social Welfare Corporation “Hagi Syakaifukusi Jigyoudan” in Hagi City (Part 3)

ISHIBASHI Nagisa, MISHIMA Sachiko, OHASHI Saori, KOH Shoken, NAKAZONO Mahito, YAMAMOTO Sachiko

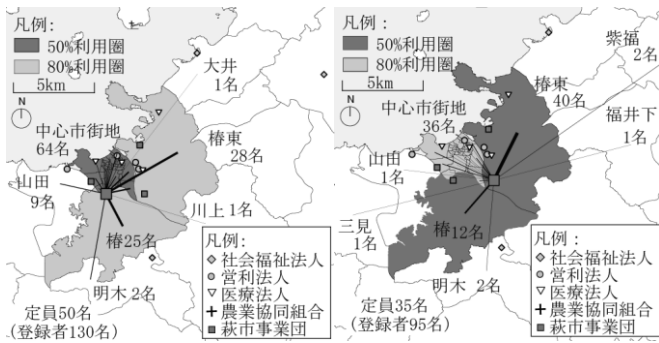


図3 施設Bの利用圏

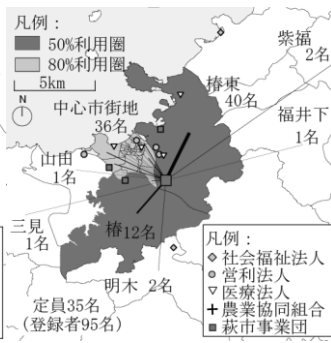


図4 施設Eの利用圏

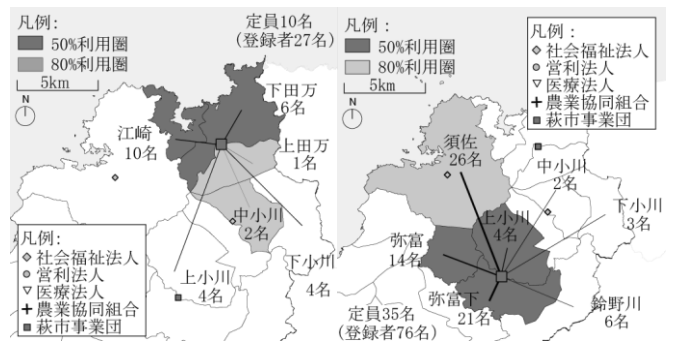


図7 施設Fの利用圏

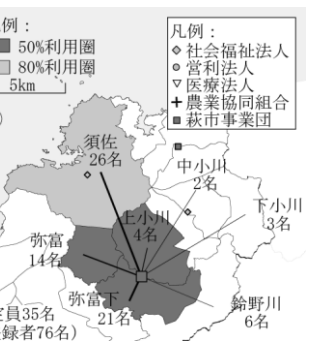


図8 施設Iの利用圏

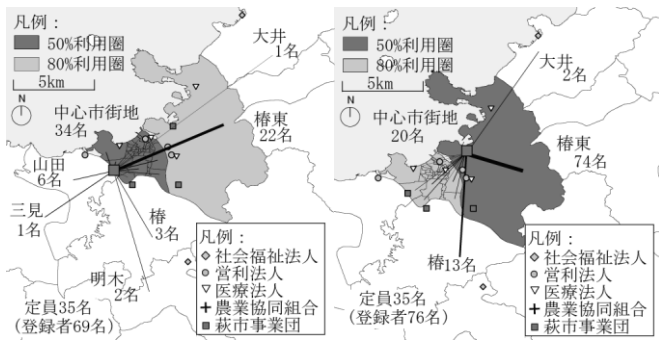


図5 施設Aの利用圏

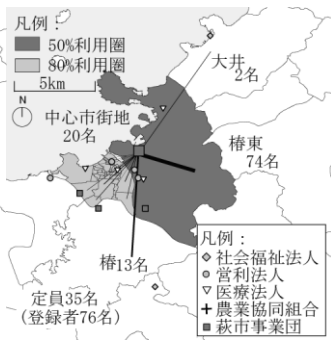


図6 施設Hの利用圏



図9 施設Dの利用圏

の設備面に関係なく施設の選択が可能であるため、施設が立地している近隣地域からの利用者が多く増加していると考えられる。

旧町に位置する施設については、施設Fは上田万地区にあり、登録者が27名で、江崎(10名)、下田万(6名)の2つの地域を合わせると利用圏が50%となり、

3.1 施設の利用圏

各施設の利用圏を図3, 4, 5, 6, 7, 8, 9に示す。旧市に位置する施設において、施設Bは椿地区にあり、登録者が130名で、施設から近い中心市街地(64名)だけで利用圏約50%を満たす。さらに椿や椿東を入れると80%利用圏を満たしており、利用圏は広域になっている。遠方から来所する利用者はケアマネージャーからの紹介が多い。施設Eは登録者95名で、椿東(40名)、椿(12名)の2つの地域で利用圏が約50%となる。これに中心市街地周辺を加えると利用圏が80%となる。施設Eでは椿と椿東の境界に立地しているため、この2つの地域からの利用者が施設Bと比較しても多く、利用圏は広域となっている。

施設Aは山田地区にあり、登録者が69名で、施設から近い中心市街地(34名)からの利用者が50%利用圏を満たしており、椿東(22名)を加えると80%利用圏を満たしている。施設から近い中心市街地からの利用者が大半を占めており、利用圏は狭い。施設Hは椿東地区にあり、登録者が109名で、椿東(74名)とこの地域だけで利用圏が約70%となり、中心市街地(20名)を加えると利用圏は80%以上となる。施設が立地している椿東からの利用者が大半を占めており、利用圏は狭い。

以上のように、施設B, Eは特別浴室等設備の整った施設であり、両施設とも広域な利用圏を持つが、それぞれ立地場所から近い地域の利用者が中心となっている。一方、施設A, Hでは、比較的介護度が低い高齢者が対象となっており、介護度の低い利用者は特浴の有無など施設

これに、上小川(4名)・中小川(2名)を合わせると利用圏が80%となる。遠くから来ている理由として、萩市社会福祉事業団の中でも唯一の民家改修型の小規模施設であり、大勢の中の一人ではなく、個人の対応ができるという理由で小規模施設を選ぶ高齢者や、性格や身体能力により大人数の施設では対応の難しい利用者をケアマネージャーが紹介していることが挙げられる。距離ではなく、施設の内容・特色で選んでいる利用者が多いため、利用圏は広がっていると考えられる。施設Iは弥富地区にあり、登録人数が76名で、弥富(14名)、弥富下(21名)で、上小川(4名)の3つの地域を合わせると約50%利用圏となり、須佐(26名)、を加えると80%利用圏となる。須佐地区内に施設があるにもかかわらず、施設Iから離れた須佐から多くの利用者が利用している理由として、他の施設が合わないという理由が一番多く、次いで顔つなぎをしたいと理由で須佐内の施設との併用する利用者が多い。また、地域周辺の施設が定員に達し断られる例もみられた。

施設Dは、見島にあり、見島は本村と宇津の2つの地区で構成されている。施設Dのある本村だけでなく、少し離れた宇津地区からの利用もあり、また要介護者だけでなく自立の高齢者が利用する1次予防の利用者も本村・宇津の両方から来所している。そのため島全体の福祉需要を満たしていると考えられる。

以上より、萩市市街地周辺の地域では、立地する地域からの利用者が多く、特別浴室等の設備が整った施設で

表 2 利用者往復延人数・送迎時間と職員所要時間

施設名	地域	車種・台数		送迎時間・職員数		日平均	
		迎え	送り	迎え所要時間・職員総数(分/人)	送り所要時間・職員総数(分/人)	利用者往復延人数・送迎時間(人/分)	職員所要時間(分)
A	樺東・9 山田・3 中心市街地・10	W2 S1 M3	W2 S1 M3	265(7)	224(6)	50(489)	20.1
B	樺・7 樺東・6 山田・5 中心市街地・10	L5 W1 M1	L3 W1 M2	58(12)	365(14)	60(660)	18.3
D	宇津・6 本村・4 宇津・2	L1 W1 M1	L1 W1 M1	58(3)	57(3)	12(115)	9.6
E	樺・3 樺東・7 山田・1 中心市街地・16	L2 S1 M3	L2 M3	415(17)	392(11)	56(807)	20.1
F	江崎・1 小川・2 下田・4	W1 M2	W1 M2	62(3)	68(3)	13(130)	10
H	樺・4 樺東・19 中心市街地・6	L1 W1 S1 M3	L1 W1 S1 M3	225(11)	230(12)	52(455)	10.8
I	上小川・1 鈴野川・2 弥富・6 須佐・7	S1 M4	S1 M3	230(6)	275(8)	27(505)	18.7

注1: 職員所要時間(分) = Σ「迎え所要時間 × 職員数 + 送り所要時間 × 職員数」 / 利用者往復延人数

職員人数: 各車に乗る職員人数
 利用者往復延人数: 利用者数往復合計人数
 注2: 車種 L: リフト車 W: ワゴン車 S: 普通車 M: 軽自動車
 注3: 中心市街地は、樺本川と松本川に囲まれた三角州内の区域とする。

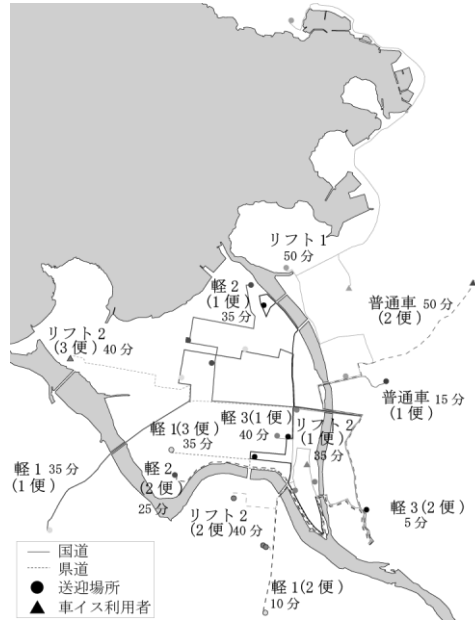


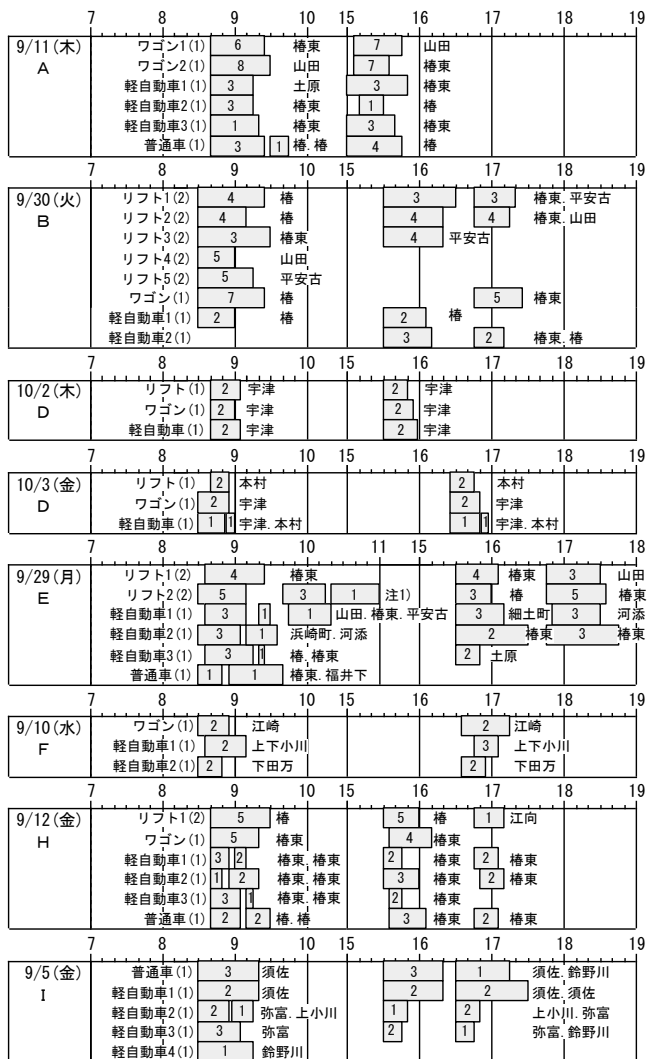
図 11 施設 E 送迎(迎え)ルートマップ

は、介護度の低い高齢者を対象としている施設よりも利用圏が広域になる傾向がうかがえる。また、山間部の地域では、小規模型と通常の施設があり、施設の内容・特徴をみて選択できるようになっており、利用形態が分担されている。

3.2 送迎距離と時間

利用者往復延人数・送迎時間と職員所要時間を表 2 に、1日の送迎時間を図 10 に示す。施設 A, B, E, I の職員所要時間は約 20 分前後、施設 D, F, H の職員所要時間は約 10 分前後と 2 つのタイプに分けることができる。2 つのタイプに分かれた大きな要因として、送迎(送り)が数回に分けて行われていること、送迎範囲が広いことが挙げられる。

施設 A では、車イス利用者がおらず、介護度 3 以上も 2 人しかいないため、乗降の介助に時間を必要としない。またワゴン車で中心市街地の利用者 6、7 人の送迎を行い、軽自動車で少人数の遠い地域の送迎を行い、役割り分担が行われている。送迎の分担は行われているが、その送迎範囲内で送迎場所が分散しているため送迎時間と職員所要時間が長くなっていると考えられる^{注 2)}。施設 B では車イス利用者が 9 人、要介護 3 以上の比較的要介護度が高い利用者が 12 名おり、送迎のほとんどにリフト車が使用されている。特に、車イス利用者の乗降に職員の介助が必要になるため職員所要時間が長くなると考えられる。送迎車リフト 4 とリフト 5 では、送迎人数は同じであり、送迎地域も一定のまとまりのある地域であったが、地域内の送迎場所の分散の程度が送迎時間の差につながったと考えられる。また、施設 E は、車イス利用者が 4 名、要介護 3 以上の比較的要介護が高い利用者が 12 名おり、送迎(迎え)は多いところで 3 回行われている。施設 E



注) 車種(職員人数) 利用者人数 送迎地域を表す。

注1) 土原, 樺, 堀内

図 10 1 日の送迎時間

の送迎（迎え）のルートマップを図 11 に示す。調査当日は中心市街地からの利用者が多く、送迎範囲は狭くなっており地域ごとに送迎の分担が行われており、一人の利用者のみを迎えに行く回数が多くなっている。特に軽 1 の 3 便、軽 3 の 1 便に関して施設から比較的近い場所であるが、道幅が狭いため、他の送迎車に比べ送迎時間がかかっていると考えられる。その結果職員所要時間が長くなっている。施設 I は、車イス利用が 4 名、要介護 3 以上の比較的要介護度が高い利用者が 7 名おり、送迎範囲が広いと、職員所要時間が長くなっている。須佐地域では、利用者の送迎場所は狭い範囲に集中しているが、施設の近隣地区からの利用者の送迎場所が分散しているため送迎の分担が難しく、車の台数を多く必要とすると考えられる。

施設 D では施設が立地している本村と少し離れたところに宇津の 2 地区から利用者が来所している。宇津地区は遠方であり車を利用者の自宅前まで乗りつけることができない道も多いため宇津地区からの利用者が多い場合、送迎に時間がかかると考えられたが結果は逆となった。これは宇津地区からの利用者がいた 10 月 2 日の調査日は要支援の利用者の利用日であったため、送迎介助の必要性がなかったためであると考えられる。一方、10 月 3 日の調査日は、宇津地区からの利用者は少なく本村からの利用者が多かったのであるが、要介護利用者の利用日であり、送迎介助の必要性がある利用者がいたため送迎時間が長くなっている。送迎介助の時間に加え、施設 D では車イス対応の送迎車を 1 台しか有しておらず、また車イス利用者の場合、送迎可能人員は 1 名となる。調査当日、車イスを使用する利用者が 2 名であったため送迎を 2 回に分けて行う必要があり、こうした送迎用の車の問題と利用者属性の違いにより、10 月 3 日の送迎時間が 10 月 2 日の送迎時間よりも長くなったものと考えられる。施設 H では、送迎（迎え・送り）とも 2 回に分けて行われているが、施設利用者の介護度が低いため介助の必要がなく、また送迎範囲も狭いため、送迎における 1 台にかかる時間が少なくなっており、職員所要時間が短くなっていると考えられる。施設 F では、車イス利用者が 3 名、要介護 3 以上の比較的要介護度が高い利用者が 6 名と利用者の多くが要介護が高いため、送迎介助に時間がかかっていると考えられる。しかし送迎範囲は他の施設に比べると狭く、送迎も地域ごとに分担されているため職員所要時間が短くなっている。

以上より、職員所要時間が長い施設では、送迎範囲が狭いが送迎回数が多い、送迎範囲が広く乗降の介助に時

間を要す、送迎範囲は狭いが地域内での送迎場所が分散している等の要因が考えられる。一方、所要時間が短い施設では、乗降の介助に時間はかかるが送迎範囲が狭い、送迎範囲も狭く乗降の介助に時間がかからない、送迎場所が 1 箇所にとままっている、地域ごとに送迎の分担ができていないなどの要因が考えられる。

4. まとめ

得られた知見は以下の通りである。

- 1) 利用者属性において、年齢・性別・利用回数については施設間で多少の差異はあるが、傾向は共通している。利用者の要介護度・車イス利用・入浴サービスについては各施設間でばらつきが大きい。旧市では比較的介護の軽い利用者は施設 A, H を、介護度が高い利用者は特別浴室等設備の整った施設 B, E を利用していることから、利用者は介護度と施設の設備を考慮して施設を選択していると考えられる。
- 2) 施設の利用圏において、旧町では一部利用者の希望により利用圏が広く重なる地域もあるが、ほぼ利用圏分担は出来ている。一方で、旧市では施設の立地する周辺地域からの利用が多いが、設備が整っている施設の方が、介護度の低い高齢者を対象としている施設よりも利用圏が広域になっている。利用者の希望やケアマネージャーの紹介などにより利用圏分担はできていないが、各施設の利用圏に特徴が見られた。
- 3) 送迎時間では、職員所要時間が 10 分、20 分前後と大きく 2 つのグループに分けられる。職員所要時間が長い要因として、送迎範囲が広い点、乗降の介助に時間を要す点、送迎場所がばらばらである点が挙げられる。一方短くなる要因として、送迎範囲が狭いことに加え、乗降の介助にかかる時間が短く、車の台数を多くし、地域ごとに送迎の分担が細かく行われていることが挙げられる。

注釈

- 1) 施設利用登録データは、施設 A, B 設 D, E, F, H, I は 2014 年 9 月の時点である。データ内容は住所・性別・年齢・介護度・車イス使用の有無・週当たりの利用回数・入浴の有無等である。
- 2) 「楽々園」では送迎には職員が 1 人で乗っているのに対し、「なごみ」では、リフト車で送迎に職員が 2 人乗っているため、送迎時間が長くなっているにもかかわらず職員所要時間が同じという結果となっている。

参考文献

- 1) 中園真人他 2 名：広域基幹施設と民家を活用した小規模デイサービス施設の整備プロセスと利用特性, 日本建築学会計画系論文集, 第 77 巻 第 675 号, pp. 1169-1177, 2012. 5

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

** 山口大学大学院理工学研究科 博士後期課程

*** 山口大学大学院理工学研究科 講師・博士(工学)

**** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

***** 筑波大学システム情報系 助教・博士(工学)

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

** Doctoral Course, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

*** Lecturer, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

**** Professor, Yamaguchi Univ., Dr.Eng.

***** Assistant Prof., Faculty of Eng., Info. and Systems, Univ. of Tsukuba Dr.Eng.